家族奪還ゲーム

ハレル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
家族奪還ゲーム

【Ｎコード】
Ｎ６７１９Ｗ

【作者名】
ハレル

【あらすじ】
そう遠くない未来。妻子持ちのいたって普通のサラリーマン、滝本誠司は、ある日息子の歩が何者かに誘拐されたことを知る。歩を返して欲しければ、我々とゲームをしろ、という指示に従い、誠司は非日常の世界に引きずり込まれていく・・・

プロローグ（前書き）

初めて投稿する小説です。読みにくいかもしれませんが、生暖かい目で見てやってください。なお、遊戯王ＯＣＧメインです。

プロローグ

そこそこ遠い未来。ある日の朝。
どこにでもいるような普通のサラリーマン、滝本誠司は、郵便受けに入っている奇妙なものに気づいた。
差出人不明の、真っ白な封筒。
何だコレは？といぶかしみながらも、他の郵便物とともに家に持って上がった。居間に入り、妻の美咲（みさき）に例の手紙以外の郵便物を渡して、ソファーに腰掛ける。
宛名は紛れも無く「ｔｏ滝本誠司」で、手違いではなさそうだ。適当に開封すると、中に入っていたのは手紙と、１枚のトレーディングカードだった。表面にはカードの名前、イラスト、そして小さな文字でテキストが書かれている。
「『スターダスト・ドラゴン』？」
白銀の翼を大きく広げ、両の脚で大地を踏みしめて、咆哮しているようなその龍。誠司はカード自体に見覚えがあった。デュエルモンスターズだ。
確か、中学生までやっていた。
「てかなんだ？『シンクロ』って・・・」
そう呟いて、カードをちゃぶ台に置いた。やめてからもう１０年近く経つ。ルールが変わったのかもしれないし、似てるだけで全くの別物なのかもしれない。
そして、肝心の手紙を見ようとした、と
「あ、とーさん」
起き掛けです、という感じで息子の歩（あゆむ）が二階から降りてきた。
「きょうはおしごとないの？」
「ああ、ないよ」
そう答えると、誠司はとても嬉しそうに、
「じゃ、今日は遊べる！？」

と誠司に聞いた。
「仕事が少しだけ残ってるんだ。それが終わったらいいよ」
「え。うん、わかった！」
少し残念そうに、そしてかなり嬉しそうに誠司は返事した。そして、ちゃぶ台に置かれたカードに気づき、てけてけと寄ってきた。
「あ、ゆーぎおーだ」
「え、やっぱりそうなのか」
「みんなやってるよ。タカシくんも、ヒロキくんも、かなみちゃんも」
目を輝かせて、『スターダスト・ドラゴン』に見入る誠司。
「へー・・・」
きっと俺ルールでプレイしているんだろうな、と思いながら、誠司は手紙に目を通した。
そこにはたった一行、
「お前に託す。絶対に渡すな」
と書かれていた。
（誰にだよ。ていうか怖っ・・・）
やっぱり、宛先を間違えているんじゃないだろうか。
「２人とも、ごはんできたよ」
美咲が誠司と歩を呼んだ。
「「はーい」」
１０月８日９時２８分。ひとつの家族の運命が、狂い始めた。

プロローグ（後書き）

ＯＣＧの対戦シーンは３話目から出す予定です。投稿は遅くなるかもしれませんが、頑張って書いていこうと思います。

黒い手紙（前書き）

滝本夫妻のやりとりとかが不自然・・・かも・・・

黒い手紙

９月１４日。
会社でせっせと書類を片付けていた誠司の携帯電話が、突然鳴った。
静かだった職場に鳴り響く着信音。
「はい」
マナーモードにしてなかったことを後悔しながら慌てて出ると、
「誠司！」
美咲だった。
「どうしたんだ？」
チラリと見た隣の席の山田君、彼の視線が痛い。
美咲はひどく取り乱しているようだった。
「歩が、帰ってこないの！」
「遊んでるんじゃないのか？」
「門限はとっくに過ぎてるのよ！？」
誠司は時計を見た。ＰＭ７：００。
「マジか・・・？」
昼飯を食べた後から、時計を全く見ずに仕事をしていた自分を呪った。勝手な居残りだ。残業手当は出ないだろう。
「そ、それで？」
帰る身支度を始める誠司。
「郵便受けに変な手紙が・・・」
「それを先に言ってくれ！」
すぐ帰る、と言って誠司は携帯を切った。
カバンを持って、上司に挨拶をして部屋を出る。急いだのもあって、５分も立たぬうちに会社から飛び出した。
駅に向かい、走る。赤信号がうっとおしい。
「ああ・・・クソっ」

信号機は急いでいる人間の敵である。
（美咲の勘違いであってくれよ・・・）
そう念じながら、誠司は横断歩道を走った。

結果的に言えば、誠司の願いは天には届かなかった。
この後一生分のすべての体力を使うようなつもりで駅から走り、家に駆け込んだ誠司は、
「歩は！？」
扉を蹴破るようにして家に入り、美咲に問い掛けた。
呆然とした顔で、首を横に振る美咲。
時計を見た。７時４７分。
「マジかよ・・・」
歩は真面目な子だ。こんな時間になっても帰ってこないのはおかしい。
そこで、手紙のことを思い出した。
「そういえば、変な手紙って？」
肩で息をしながら、尋ねる。
「コレ・・・」
美咲が、差し出した。この間の手紙とは違う、真っ黒な封筒だ。
もう封は開いている（美咲が読んだのだろう）。中には、これまた真っ黒な手紙が入っていた。
誠司が恐る恐る開くと、文字化けしたような筆記体で文がつづられていた。
「初めまして、滝本夫妻。私達はとある目的のために活動している『組織』です。時間もあまり無いので早速本題に入らせていただきます。この度私達がお預かりしたご子息、返して欲しいと願うのであれば、私達の企画したゲームに参加していただきたい。ただし、その参加条件としてあなた方の・・・」

（なんだこの物騒な雰囲気しかしない手紙は・・・）
「・・・あなた方の所有している『スターダスト・ドラゴン』、このカードを持ってお越しいただきたい。そうしていただけなければ、私達はあなたの参加を認めることが出来ず、ご子息の尊い命を保証することも出来ません。」
「『スターダスト・ドラゴン』って・・・」
たしか、この前来た手紙に入っていたカードだ。
「ゲームは主に、カードゲーム、『デュエルモンスターズ』を用いて行います。私達が用意したプレイヤー9人と、『スターダスト・ドラゴン』を賭けて対戦していただき、見事全勝なされたあかつきにはご子息をお返しし、『スターダスト・ドラゴン』も頂戴しません。尚、警察機構等に話を持ちこまれた場合、ご子息が帰宅することができる日は、永遠に来ませんのであしからず。」
手紙を読み終えた誠司は、崩れるようにイスに座った。
「なんだよそれ・・・・」
言葉が口を突いて出た。
「たかがカード1枚のために、こんなメチャクチャなことするのかよ・・・」
狂っている。この手紙の主は。
「警察は・・・」
「言ったら返さないって書いてるだろう」
「じゃあどうすればいいの？」
「・・・・・・」
何も言えず、黙りこむ誠司。どうすればいいのだろう。頭の中はその疑問でいっぱいいっぱいだった。
と、電話が鳴った。
美咲と誠司の間に、緊張が走る。歩を連れ去った犯人かもしれない、という。
鳴り続ける電話。数秒だけの熟考の末、誠司は腹を括った。
「もしもし」

どんな人間なのか、と恐る恐る受話器を取る。そして、
『よう滝本！久しぶりィ！元気してる？ｗｗ』
と、恐ろしく聞き慣れた声が聞こえてきた。
「音無（おとなし）かよ・・・」
腰が抜けそうになった誠司は、近くにあったイスに、また崩れるようにして座った（背後で、美咲のため息が聞こえた）。
『どうした？子供でもさらわれたような声してｗｗ』
・・・この男、今回の件に絡んでいるのではなかろうか。
「あいにく、テメェみてぇなアホと雑談してるヒマはないんだ。じゃあな」
『あ、ちょ待て切るな俺・・・』
ブツン。
本当に青筋を立てながら、誠司は受話器を叩きつけるように置いた。
「あのアホが」
そう毒ついて電話から離れようとしたそのとき、再び電話が鳴った。
誠司と美咲の間に、再び緊張が走る。
スッ・・・と、今度は早々に受話器を取った。
「もしも・・・」
『ったく、切るんじゃねえよ。せっかく俺がいいこと・・・』
「お前いっぺん水の張られてないプールに飛び込んで来い」
親友に対して殺意が湧いたのは、これが初めてではなかったが、もう今度は相当頭にきていた。
『オザナリだなぁ、まったく』
「じゃあなバイバイ」
『歩のことで電話した』
受話器を戻そうとした手が止まった。
「どういうことだ？」
返答次第によっては絶交してやるつもりで尋ねる。

『俺ん家のポストに、黒い手紙が入ってた。お前のガキをさらったっつー内容だった』
「・・・！？」
『イタズラかと思った。だからさっきはあーゆうノリで電話したんだ。悪かった』
確認するための電話だったのか。
『ハァ？なにふざけたこと言ってんだこのアホがｗｗってノリで返答してくれたらどんなに良かったか・・・』
「ゴメン、俺も言い過ぎた」
『まぁ気にすんなって』
「ていうか、なんでお前のトコに手紙が？」
音無と今回のことは関係ないはずだ。
『主にデュエルモンスターズを使ってゲームを行う。そう指定してきたんだよな？』
「ああ。そうだ」
『じゃあ多分、俺は必要なんだろうぜ』
「え？」
音無が時折意味深な物言いをするのは、昔から同じだった（たいていアホな意味だったが）。
『言ってなかったけど俺、カード販売店舗グループの社長なんだ』
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・は？」
「社長、ＣＥＯ、代表取締役。わかる？」
「ハァ！？」
てっきり無職のパラサイド男だと思っていた。
「嘘・・・だろ？」
『アホ言っても嘘は言わん。俺は社長です』
「マジかよ・・・」
『お前、中２のときくらいに遊戯王やめたんだよな？』
「ああ。確か・・・環境がメチャクチャで、ついていけなくなったんだ」

『黎明期だったからな。仕方無ェよ』
「ていうか、遊戯王なんてまだ続いてんのか？」
『ああ、続いてる。環境も調整されて、ゲームバランスも昔よりマシになった』
「・・・そうなのか」
年月が経つと、色々なものが変わっていくんだな・・・と、誠司は頭のスミで思った。
『ルールも変わったからな。きっと、その辺サポートする人材を用意したかったんだろう』
「ご丁寧に・・・」
『俺とお前の交友関係が割れてるんだ。相手は相当ヤバい連中かもしれねェ』
「ヘタに警察にも掛け合えない、か」
もう誠司と音無の身の回りには監視者がいる、のかもしれない。
『そういうこと』
「どうすりゃいい？」
『指示に従う。それしかないだろ』
「・・・・」
奴らにいいようにされている現状に、誠司は悔しさを憶えた。
しばらくして、黙りこんでいた誠司に、音無は突然切り出した。
『今度、会わないか？』
「え？」
『会って話をする必要があると思う。』
「そ、そうだな」
『遊戯王に復帰するかもだし、いい機会だ。場所を決めよう』
「わかった」
その後、誠司は音無との待ち合わせ場所を決めた。今度の土曜、この近くにあるカードショップに集合するそうだ。
受話器を置いた誠司に、美咲が問い掛けた。
「音無君・・・なんて？」

「どうやら今回のことに巻き込まれてるらしい」
「そんな・・・！」
「それで今度、会うことになった」
腰をおろす誠司。
「歩はどうするの？」
「とりあえず、相手の指示に従おう。警察に行った瞬間、「お前の息子はもう帰らないだろう」なんてことになるのは俺だっていやだよ」
不安げにしている美咲に、誠司は落ち着かせるように言った。
「なんとかするよ。絶対にな」
しかしなんとかできる自信は、正直なところ、誠司には無かった。
心のスミで、溜息をつく。久しぶりの友人との会合が、こんなにも重いものであろうことなど、誰が想像できただろうか。
（最悪だ・・・）

黒い手紙（後書き）

登場人物の名前は、案外適当です

来店（前書き）

投稿が随分遅くなってしまいました・・・反省してます・・・。
一応対戦シーンはありますが、ばっさり行きます。

来店

音無と電話した週の土曜日。誠司は家の近くのカードショップに来ていた。
カードショップ・サイレント。
「「音無し」だけにってか」
中二臭いと思いながらも、店に入る。見渡せば、たくさんのガラスのショーケースに、展示されているこれまた大量のトレーディングカード。
「遊戯王ばかりじゃないんだな・・・お」
近くのショーケースに近寄る。
「なつかしいなぁ、コレ・・・」
『オシリスの天空竜』。アニメの主人公が使っていたカードだ。
友達が持っていたのを、羨んだ記憶がある。
「ていうか、どこで手に入るんだコレ？」
そう呟いた時、
「よう滝本〜」
と、背後から聞き慣れた声がした。
振り向けば、やはり音無だった。
「久しぶりだな、音無」
電話で社長とかのたまっていた割に、音無はいたって普通の格好をしていた。
「社長じゃなくて店長なんじゃないか？とか思っただろ」
「お、思ってない思ってない」
図星だった。
コイツは昔から、やたらと読みがいい傾向がある。
「ま、いいけどさ〜」
ポリポリ、と頭をかく音無。
「あ、ちなみに、その『オシリスの天空竜』はゲーム付属カードで、

公式大会じゃ使用できないやつだ」
「ゲーム付属？」
「遊戯王に限った話じゃないけど、書籍付属、ゲーム付属、雑誌の定期購読特典、応募者全員サービス（有料）なんて、ザラだぜ？」
肩をすくめる。
「へぇ・・・」
そういえば、子供の頃はマンガ雑誌はあまり買わないほうだったし、遊戯王関連のゲームも、買ったことは無かった。
「おかげでこっちは、営業戦略で雑誌とかゲームとか置かなきゃならん」
このままじゃホビーショップになりかねんよ、と冗談めかして音無は店の一角を指した。
ゲームソフト、雑誌などが並んでいるコーナーがある。
「おっと、ここで立ち話もなんだ。こっちに来てくれ」
誠司は音無に連れられ、店の奥に入っていった。

誠司は、音無が受け取ったという手紙を見せてもらった。
「お初にお目にかかります音無様。我々は、ある目的のために行動している『組織』です。」
誠司がもらったものと同じく黒い封筒に入れられ、穏やかな文章で綴られた、物騒な内容の手紙だ。
「なんか読んでると徐々にイライラしてくる手紙だよな」
音無がこぼした。同感だ。
「我々は、滝本誠司様のご子息をお預かりしています。そして滝本様は、ご子息を取り戻すために、我々の行うゲームに参加し、デュエルモンスターズで戦うことになっています。ですが我々は、滝本様はこのカードゲームそのものを、とうの昔にやめている、という訃報を知りました。」

（なにが『訃報』だ）
「そこで、滝本様がデュエルモンスターズに復帰できるよう、サイレントグループの社長、音無様に補佐していただきます。拒否権はございません。尚、各種警察機構にこの話を持ち込まれた場合、このお話はなかったことにさせていただき、歩君も家に帰ることはありません。あしからず」
　手紙を読み終えた誠司は、またふー・・・と息を吐いた。深く呼吸でもしないと、怒りで頭がおかしくなりそうだからだ。
「メチャクチャだろ？」
「ああ」
　ぎゅうっ・・・と誠司が拳を握りこんだ。
「・・・っ」
「こいつらの指示に従うのなら、俺はお前に協力する」
「？」
「こいつらは、条件さえ飲めば歩君を帰すと言っている。なら、俺は従うべきだと考える」
　もっともだ。だが
「そんなこと、信用できないだろ」
「だが、警察に行っても、そこで終わりだ」
「っ・・・・そうだな」
「ま、そういうわけだから」
　音無はガシッ、と誠司の腕を掴んだ。
「なちょっ！？」
「こっち来な」
　言い返すヒマもなくずるずると引きずられて、誠司は店先にやってきた。
「な、なんだよ？」
「仕事の時間だ！来いお前ら！」
　音無がパンパン、と手を叩くと、レジ裏にいた男女が出てきた。
「ど～かしましたぁ？」

ゆるゆるとした感じで、この手の店の店員にあるはずの意欲が感じられない。がしかし
「ルール解説係の、佐藤と日暮(ひぐらし)だ」
音無がルール解説係、と言った瞬間、
「どーも、佐藤マコトです！」
「日暮(さんし)三枝です！」
と、先ほどとは打って変わり、店員スマイル全開で、ポーズまでキメて実にハイテンションに挨拶してくれた。
さきほどとは全く様子が違う、あまりの豹変ぶりに、誠司は少し引いた。
「キャラ作ってるのか？」
「「給料はずんでくれるもんで！」」
2人は店員スマイルを保ったまま言った。
「サイレントの店舗1軒1軒には、こういうキャラのルール解説係がいるんだ」
「サイレントじゃないよね。音無しどころかやかましいレベルだよね」
「あ～お前ら。コイツ、いい歳こいて遊戯王に復帰したいらしいから、ルールの説明してあげて」
音無は誠司を指して言った。
「は？」
それは違う、と言いたい誠司を無視して、店員2人は向かい合うように近くのテーブルに座った。
店員スマイルは貼りついたままだ。
「ではでは、デモデュエルを行います！」
「なお、ルール解説のため、カードの順番は仕組んであります！」
「そ、そうですか・・・」
教える相手であるはずの誠司を置き去りにして、ルール解説係はガンガン進めていく。
「「デュエルスタート！」」

マコトＬＰ８０００
三枝ＬＰ８０００

「まず互いに持ち点８０００ずつからスタートします」
「これを奪いきったら勝ちだぞ～」
「他にも勝利条件は多々ありますが、ここでは割愛」
「細かいことは、また後で」
阿吽の呼吸で、解説を進めていく2人。
「デュエル開始時、お互いにデッキの上からカードを5枚引いておきます。この手札を使って、デュエルを進行していくのです！」
「まずは僕の先攻、ドロー！」
山札から勢い良くカードを引く三枝。
「ターンの開始時、ターンプレイヤーはデッキからカードを1枚『ドロー』します」
「ドローフェイズ終わり！スタンバイフェイズを経過して、メインフェイズに入ります」

店員たちの様子を見ながら、誠司は音無に言った。
「俺、復帰したいわけじゃないし、フェイズの進行なら知ってるぞ」
だが、音無はボソリと、
「本当の理由を言うわけにもいかんし、それに、こういうシナリオなんだ。見守ってやってくれ」
と、言い、腕組みした。

三枝が手札から、緑の枠色のカードをぺち、と出した。
「では僕は、魔法カード造園・・・じゃね、『増援』を発動します」

「そんな字幕無きゃわからんようなネタ入れなくていいだろ」
「まあ、文章だからな」

「魔法カードは、自分のメインフェイズに使える、便利なカードです！1ターンに1度まで、とかそんな制限ありませ～ん！」
「効果により、デッキから☆が4以下の戦士族モンスターを手札にくわえます。本当ならこの後、デッキはシャッフルしなきゃならないけど、解説の都合上、割愛！」

「だから知ってるんだけどな・・・。てかさっきからそうだけど、割愛していいのか？」
「解説だからな」

「魔法カードは、使った後墓地に行くよ～」
「そして、今手札に加えた『切り込み隊長』を召喚！」
手札から枠色がオレンジ（？）のカードを縦向きに出す三枝。

切り込み隊長
☆3　ＡＴＫ（攻撃力）　１２００

「切り込み隊長の召喚時、手札から☆4以下のモンスターを特殊召喚できます！『チューン・ウォリアー』を特殊召喚！」
薄い枠色のモンスターが置かれた。

「お前がフェイズの流れはわかってるとかごちゃごちゃ言うから、こいつら「召喚」とか「モンスターカードゾーン」とか「魔法・罠ゾーン」とか他にも色々ハショり始めたぞ」
「俺のせい！？」

チューン・ウォリアー
☆3　チューナー　ＡＴＫ　１６００

「チューナーって？」
そう誠司が質問した瞬間、キラーン！！と2人の目が光った。
本当に光った。
「いまから説明しまさぁ！」
「☆3『切り込み隊長』に、同じく☆3『チューン・ウォリアー』をチューニングし、エクストラデッキから、☆6『大地の騎士ガイアナイト』をシンクロ召喚します！」

大地の騎士ガイアナイト
☆6　シンクロ　ＡＴＫ　２６００

場に出されるモンスター。それに誠司は見覚えがあった。
（白枠のカード！）
『スターダスト・ドラゴン』と同じだ。
しかも、このカードは融合デッキから出てきた。
「シンクロ召喚は、チューナー1体と非チューナー1体以上を墓地に送り、そのレベル合計が等しいシンクロモンスター1体を、エクストラデッキから特殊召喚する行為です」
「チェーンに乗らず、またシンクロ素材となったモンスターはリリースされたとしては扱いません」
楽しそうに説明する2人だったが、誠司は思いっきり置き去りにされていた。
「エクストラデッキ・・・？リリース・・・？」
聞き覚えの無い単語が頭の中で反響しあっている。
「あ～。融合デッキはエクストラデッキ、生贄はリリース、生贄召喚はアドバンス召喚、と、マスタールールから一部の用語が変わったんですよ」
マコトと三枝のにこやかさが、誠司には少し痛かった。
「シンクロ召喚のシステムが導入されたのも、マスタールールからです」

「あ、じゃあ、マスタールールから変化した事柄についての解説をしていきますね！」
融通の利く店員だ・・・。
普段はやはり初心者指南がメインなのか、よく見れば彼らの手札には儀式魔法や『融合』もある。誠司はなおのこと申し訳なくなってきた。
「では、先攻は攻撃できないので、カードを1枚伏せ、ターン終了！」

三枝　手札3

「ではでは、私のターン！」
シュッ・・・とカードをドローするマコト。
「メインフェイズに入り、手札から『二重召喚』を発動！このターン、あたしは通常召喚が2回できます！そして、手札から『グリーン・ガジェット』を召喚！」
「あ」
これも見覚えがあるカードだ。主人公（表）が使っていたカードだった気がする。
「グリーン・ガジェットの召喚時、デッキから『レッド・ガジェット』を手札に加えます」
1：1交換で、損失なし。
「そして、『レッド・ガジェット』を召喚して、効果発動！」
たしか、グリーン・ガジェットと似たような効果だった気がする。
「デッキから、『イエロー・ガジェット』をサーチ！」
誠司は場を見て少し驚いた。
事実上、手札1枚の損失で2体のモンスターが場に並んでいるのだ。相変わらずガジェットは恐ろしい。
「で、☆4のモンスター2体を重ねて、『ジェムナイト・パール』をエクシーズ召喚しま～す！」

ジェムナイト・パール
★４　エクシーズ　ＡＴＫ　２６００

（また新しい単語が出てきた・・・）
黒いカードを注視する誠司。
「あ、ちなみに、同じレベルのモンスター複数体を重ねて、エクシーズモンスターを特殊召喚する行為を、エクシーズ召喚と言います」
「重ねられたモンスターは、場に存在しているとは扱われません。なんと言いますか・・・エクシーズモンスターの中に、エクシーズ素材として内包されてるような感じです」
（わからねぇ！）
「エクシーズモンスターには、エクシーズ素材を取り除くことで効果を発動するやつがいますが、残念ながら、あたしのジェムナイト・パールは効果持ちではありません」
「あと、エクシーズモンスターの★は、レベルではなく、ランクというものになっています。実際、黒いし、表示もレベルとは逆向きでしょう？」
「エクシーズモンスターも、シンクロモンスターと同じでエクストラデッキにいるモンスターです」
「おっとそういえば。ちなみに融合デッキは枚数に制限がありませんでしたが、エクストラデッキは、シンクロ、融合、エクシーズ、それらを合わせて１５枚までしか入れられません」
「昔と違って、入れ放題ってワケにはいかないんだな」
「シンクロもエクシーズも出しやすいですからね～」
「あ、でも融合モンスターも近年は出しやすくなっているんですよ～」
「ありがたいことですね～」
「・・・・」
憶えることの多さを想像して、誠司は頭が痛くなってきた。

そして1時間後。
説明デュエルを終え、誠司に現在の環境のおおまかな説明をしたルール解説の2人は、もとどおりの気だるげな顔に戻ってレジ裏に引っ込み、誠司はテーブルに突っ伏していた。
「で、理解できたか？」
むかいのイスに座る音無。
「にわかだったからな。ルール自体がこんなに細かいもんだとは思わなかった」
重々しく顔を上げ、誠司は返答した。
そういえば、昼を過ぎているのに客が全くいない。どういうことだろうか。
「今日、この店には緊急で臨時休業にしてもらった。ここの店長は、レジ裏であの2人と昼寝でもしてるんじゃねえかな」
「やっぱ社長なんだな」
実は、誠司はつい先ほど、「サイレント」について調べてみたのだ。するとなんたることか、「カードショップ・サイレント」は沖縄にまで5軒も店舗があるほど全国展開しているグループだった。
「人間、どう出世するかなんてわからないもんだな・・・」
「ん。なんか言ったか？」
「何も」
飄々とした態度が少し忌々しい。
「で、どうするんだ？」
「何を？」
「デッキだよデッキ」
「あ。」
忘れていた。デッキが無ければ、やつらの言う「ゲーム」に応じることが出来ない。

「一応、カードはある」
木曜に、実家に帰って押入れにもぐった。そこで見つけたホコリだらけのダンボールが、車の中にある。
「まさにパンドラのハコだな」
嬉々とした体で、音無はにいっと笑った。
「どこがだ」
俺の事情を忘れてるんじゃないか？と、誠司はひそかに訝しみ始めた。

来店（後書き）

ちなみに、三枝とマコト、どちらが勝ったのかは決めてません。
あのローペースでＬＰ８０００削るということを考えると、ちょっとめまいｇ（ｒｙ
投稿のペースは上げたいと思いますが、なかなかはかどりません。
ついつい別の方向にそれたりなんかしちゃって・・・・
しかし、挫折はしない（挫折も何もまだ３話目だけど）

『スターダスト・ドラゴン』（前書き）

相変わらず投稿が遅くて、ホントーにすみません。
誠司は、周りのプレイヤーに【カオス】デッキが多かったという設定です。

『スターダスト・ドラゴン』

誠司は、サイレントの店の奥に戻ってきていた。そこそこの大きさのダンボール箱を抱えて。
横には音無もいる。
「よい・・・しょっと」
畳の上に箱を置いて、中を覗いた。
「ワオ」
音無が作ったようなリアクションをする。箱の底には隙間無くカードケースが敷き詰められていた。
「今でも使えるカードがあるかどうかは・・・五分五分っぽいな」
ケースのひとつを取り出しながら、音無はコメントした。
「何言ってんだよ。『サンダーボルト』とかなら即投入できるじゃんか」
「・・・・・・やっぱお前、禁止制限のことも知らないんだな」
「ハ？」
間抜けな声が出てしまった。
「今日、遊戯王には厳し～・・・・い、使用カード制限がある。例えば、サンダーボルトも今は使用禁止。デッキには入れられません」
「ハァ！？」
「禁止解除は夢のまた夢さ」
ふ・・・とスカした顔をする音無に、誠司はイラっとしたが、
「他にも使用が規制されてるカードはある。ゲームバランスを保つためだ。仕方無えよ」
「所詮アニメグッズじゃんか」
そういえば、徐々に遊戯王から離れていったのは、そういう思いも芽生え始めたからだった。環境にウンザリし始めたのも大部分だが。
「だが遊戯王自体、環境の整備が少しずつだな・・・」

「改善されてる。聞いたよ」
「さらには、世界で最も流通しているカードゲームだ。ギネス記録にも載ってる」
「マジか」
十数年経っても流通が続いているなんて、相当ハマりこんでいる層がいるのだろう。
（たかだかカードゲームに・・・・アホらしいな全く）
そういえば、さっき見た『オシリスの天空竜』の値段は、４ケタ代だった。というか、これからデッキを作るためにカードを手に入れなければならないだろう。出費のことを考えると、暗澹たる気分になった。
「じゃ、今の環境でも使えそうなカードを探そう」
音無が淀んだ空気を仕切りなおして、２人はケースを取り出していった。
ケースのフタを開ければ開けるほど、本当に色々なカードが出てきた。
『モリンフェン』『ワイト』を始め、『ファイバーポッド』に『デビルフランケン』などのキラーカードや、『デーモンの召喚』や『真紅眼の黒竜』など、テレビでも見かけたカード達。
『月の書』が出てきた時には
「コレ、そこまで使えねえよな・・・」
「それ今、制限」
「・・・！？」
という齟齬に満ちた会話が発生したりもして、誠司が若干にわかだったことも露呈した。
そんな風にダンボールをあさり続け、２時間が立った。
「コレくらいか・・・」
目の前に積んだ数枚のカードを見ながら、音無は息をついた。
「あ～・・・。あ、後これもだ」
ポケットから財布を取り出し、その中から誠司はカードを取り出

す。
『スターダスト・ドラゴン』のカードだ。ひょっとしたら使えるかも、と思い、財布に入れておいたのだ。
実際、サイレントの繁盛ぶりを調べるついでに調べたら、そこそこ汎用性の高いカードだということがわかった。採用して損はないだろう。
「必須系はだいたい選んだから・・・って、・・・・・・・・・・オイ」
「え？」
抜き出したカードの束の上に、ぺち、と『スターダスト・ドラゴン』を置いた誠司が音無を見ると、まさに顔面蒼白といった顔で、こちらを睨みつけていた。
「な、なんだよ・・・？」
気圧されて後退すると、音無はズザザザザ！！！ととてつもない勢いでカードの束に肉薄し、
「おまっ・・・コレ、どこで手に入れた・・・」
と、飛び出すんじゃないかというくらい目を見開いて『スターダスト・ドラゴン』を凝視しながら誠司に尋ねた。
「手紙で来た」
簡潔に事実を告げる。
「なん・・・だと・・・？」
顔中に青筋を立て、眼を見開き口をΠの形にしながらこちらを見る音無。誠司はさすがに少し引いた。
「おまっ・・・・コレが一体どれだけレアなカードかわかってんのか？？？？？」
顔が近い、そして怖い。
「いや、まぁ、そこそこ使えるカードらしいってのはさっき知ったけど・・・」
ヤンキーにカツアゲされているヘタレ学生のような気分で、誠司は答えた。

「そうじゃねえ」
頭が冷えてきたのか、離れてくれた。
そして、とてつもなく大真面目な顔で口を開く。
「こいつは、イラスト違いのカードなんだ」
「へえ」
そういえば、アニメでもイラスト違いの『ブラック・マジシャン』が出てきていた気がする。
「・・・て、そんな血相変えるようなことか？」
ＴＣＧはイラストが売りでもあるのだ。イラスト違いのカードなんて、レアだろうが探せばいくらでもあるだろう。
「『スターダスト・ドラゴン』のイラスト違いカードはな、世界に１枚しか無いんだよ」
その台詞を聞いた誠司は、自分の存在している空間が凍りついたような気がした。
「・・・え？」
「ネットオークションに出せば、５万はくだらねぇ値段で落札されるぞ」
「ハァ！？」
すっとんきょうな声を出してしまった。
「しかも円じゃねえ。ドルでだ」
「ハア！！！？？？？」
じゃ、最初からドルでの値段を言ってくれよ。と言いたかったが、
「じゃ、俺は買うヤツに売れば５００万円くらいはぼったくれるようなモンを財布に突っ込んでたのか・・・・？しかも結構雑に」
震える声で出てきたのは、そんな言葉だった。
「・・・・ていうか、奴らは『スターダスト・ドラゴンを賭けのネタにしてゲームに参加しろ』って指定してきてんだけど」
「ハアァ？？？！！！」
こんどは音無が驚く番だった。
「ちょｔｙとちょｔ待」

あたふたあたふたしている。
「ふざっ・・・ふざけんなよっ。聞いてねえぞそんなのっ・・・・というかなんでお前のとこにそれが行くんだよっ・・・？」
誠司にではなく、地面に向かって呪詛の言葉を吐いている。
（コイツ、したたかにＴＣＧキチなんじゃないか？）
誠司が心の片隅で、冷めた感情を抱いていると、おもむろに音無が立ち上がった。
「ヤツらにこのスタダを渡すわけにはいかねえ」
と、決意のこもった目で誠司を見、
「デッキ作るぞ、来い」
「うあ何？ちょい待て！ちょっ」
誠司の腕を掴み、有無を言わせず店先に連行していった。

また店先に出てきた２人は、ショーケースに並ぶカードに目を通し始めていた。
「このＢＦっつうシリーズのカードは、安定性の高さとそれなりの爆発力を併せ持つ、優秀なカテゴリだ。値段が張るのもちょいちょいあるが、ガチデッキとしては十分だ！負けねえ！」
熱のこもった音無の解説に、水を注すようなことを言うのは気が引けたが、
「できれば、出費は抑えたいんだ。俺はブルジョワじゃないからな」
誠司にも経済事情はある。
「何あまっちょろいこと言ってんだ！奴らの目的なんてどうせ転売からの金もうけだ。そんな連中に、カードゲーム界の文化遺産たるスタダは絶対に渡さん！完膚という言葉自体が無くなるくらい徹底的にぶっ倒すんだよ！」
あらぬ妄想に囚われている。
そういえば音無は、昔から思い込みが激しい傾向があった気がす

る。
「クールになれよ！目的はともかく、そもそも誰の事情でこんなことになってると思ってるんだ！俺の事情だからね！歩が帰ってくるんだったら、正直こんなモンくれてやりたいくらいだ！」
と、そこまで言って誠司はハッとした。
「！」
音無も気づいたようだった。
・・・不自然な点に。
「・・・音無。お前、自分が誘拐犯だったら、どういう要求する？」
しばしの沈黙の後、音無は答えた。
「「子供の命が惜しければ、俺の欲しいものをよこせ」って感じで言う」
いまさらになって気づいた。いや、あまりの異常事態に、お互いに気付けなかったのだ。
「奴ら」の回りくどさに。
欲しいものがあるのなら、「よこせ」と言えばいい。人質がいるのだから。それを奴らはよこせとは言わず、「賭けて勝負しろ」と言ってきた。
何故なのか？
・・・残念ながら、２人にそれはわからなかった。
だが、「ゲームに参加しなければ、歩は帰ってこない」という、分かっていることがある。
ここはそれに従うべきだ。
気を取り直し、２人はデッキの構築のためにカードを吟味し始めた。音無も、誠司の要望を聞き、出来る限り安上がりに、それでいて強く。その条件を満たすカードを探した。
そして、あまりにもあっさりと、希望のカード群は見つかった。

『スターダスト・ドラゴン』（後書き）

『月の書』は便利なカードですが、「大して使えないカード」と思っていた時期がありました。
今はしっかりとデッキに入れていますw

投稿速度はできる限り速くしようとは思うのですが、なかなか・・・
とはいえちゃんと完結させることは決めています
見てくれている方（いるのかなＴ　Ｔ）は、長い目で見てやって下さい

ところで、イラスト違いという設定のスタダって、オリカ扱いになるのかな？

折れる（前書き）

相当遅くなりました。
スミマセン（＿＿）

誠司の復帰第一回目のデュエル、前編

折れる

サキタマスタジアム。
サキタマにあり、大規模なスポーツ大会の開催の際に、よく使われている。ワールドカップの会場になったこともある。
そこの片隅にある公園に、誠司は来ていた。
実は、音無も来ていて、物陰からこの公園を覗いている。
公園は、平日の朝だからか、人気はほとんど無く、誠司の正面に立っている人間しかいない。
ミニスカートに、薄桃色のフリースを着て、フードをすっぽり被っている少女。
じっとこちらを見るこの少女が、誠司の最初の対戦相手のようだった。

誠司が音無とデッキを作ったその日。家に帰った誠司はポストに黒い手紙が入っているのを見つけた。
慌てて開封してみれば、やはりあの文字化けしたような筆記体の文章が綴られていた。
『今日1日で、滝本様がゲームに参加するつもりがある、ということがわかりましたので、この手紙をお送りしました。』
今日も監視されていたようだ。
気味の悪さにげんなりとしながら、続けて読む。
『同封した地図を参考にし、1週間後の朝8：00までに、サキタマスタジアム第2公園においで下さい。そこにいる者が、ゲームの詳細説明と、あなたの相手をします。尚、『スターダスト・ドラゴン』もお忘れなく。』

１週間という時間で、誠司は音無にみっちりとしごかれ、現在の環境も大体把握して、デッキも完成した。復帰にはほとんど問題はない。
そして、手紙の指示どおりの場所に誠司は来た。時間にして７時５６分。
そこには怪しい少女もいた。
じっとたたずむ少女に、誠司が身構えていると、彼女は携帯電話を見、
「ちょっと早いけど」
そう呟いて、近づいて来る。そして、ハイ、と持っていたブリーフケースをゆるりと突き出し、
「『ゲーム』に必要なものが入ってる」
そう言った。
か細い、透き通った声だった。
受け取る誠司。
「・・・爆弾なんか入ってないよ？」
なかなか開けない誠司に、少女は言った。
おそるおそる誠司が開けると、そこに入っていたのは、変わった形のタブレット型コンピュータと、ヘッドマウントディスプレイだった。
「これは・・・？」
「次世代型デュエルディスクと、それに対応するＨＭＤ」
気取るわけでも、不満そうにでもなく、無感情に説明をする。
「まさかとは思うが、これを着けてカードゲームをやろうってのか？」
「そう」
着け方を見せるね、と言って、少女はもう１セット同じ物を取り出した。

誠司のものは灰色だったが、そちらは色が水色だった。
「まず、ディスクにつけられているベルトを腕に巻き、固定させる」
みようみまねで付ける誠司。
「デッキホルダーは、ベルトのところにくっ付くようになってる。そこにデッキをセットして」
カチ、という小さな音で、ホルダーが固定されたのが分かった。
「次にＨＭＤ。これはそのままだね。被って装着完了。立体映像が見えるようになる」
「ちゃんと回りも見えるんだな」
あたりを見回す誠司。
「じゃなきゃ危ないでしょ？」
誠司がデッキをホルダーに入れると、シャシャシャシャシャシャ・・・と勝手にシャッフルされた。
「うわっ」
「オートシャッフル機能つき」
便利な機能ではあったが、不気味だ。
「カードをセットする場所はどこだ？」
とてもではないが、ＨＭＤ自体に、魔法・罠、モンスターカードゾーン１１枚分のカードをセットできる広さはない。
「画面をタッチすれば、開くよ」
言われるままに画面に触れると、裏面からシュッ、と５枚分のプレートが飛び出した。次いで、画面に２つずつ、ＬＰ、手札枚数などが表示される。
「プレート１枚分を、モンスターと魔法ｏｒ罠１枚ずつで兼用、フィールド魔法は専用の置き場所が飛び出す」
「わかった」
「じゃ、『ゲーム』のルールについての説明をします」
「ああ」
「まず、あなたは『スターダスト・ドラゴン』を賭けて私たち、トーナメントコントローラー９人とデュエルをしてもらう」

「トーナメントコントローラー？」
初耳の単語が出てきた。
「遊戯王ＯＣＧには、版権会社に公認されている大会と、そうでない大会が存在する。公式のものではない――『私』の大会では、数千万単位の金が動くこともある。そして、一部の強欲な主催者は、私たちトーナメントコントローラーを使って、大会を操作するの」
誠司にとっては、身近な話では無いが、
「イカサマじゃないか」
「正確に言うと、それは違う」
少女は首を振った。
「確かに私たちは強いカテゴリにこそ入るけど、カードゲームにはやっぱり『運』という用素があるから。想定外の人間が優勝を決めることもある。・・・ごくまれにだけど」
誠司は、『最強のデッキ』は存在しない。という音無の言葉を思い出した。
「だが、見たところ、君はまだ未成年だろ？そんなことに荷担していいのか？」
そう、尋ねると、少女は無表情だった顔を曇らせた。
「・・・誰も気にしないから」
一瞬だけ変わった彼女の表情は、哀しみが現れているように見えた。
「・・・ルールの説明にもどるね。私たちは、個人個人でスターダストへの対価を賭けて対戦することになってる」
「え？」
奇妙な話だ。
イラスト違いのスターダスト・ドラゴン。それが欲しいからこんなゲームをやっているのではなかったのか？
「私たちの雇い主はスターダストの「中身」のほうに興味がある。私達があなたに勝ってもすぐに手に入るわけじゃなく、「最終的に」スターダストを手に入れることになってる」

「中身？」
データ・・・か何かだろうか。
「８時」
少女は呟くように言った。
「ザ・ゲーム」

ＤＵＥＬ　ＳＴＡＲＴ！！

いきなり宙に現れた文字で、誠司は久しぶりに
「うわっ！？」
飛び上がるほど驚いた。
「ソリッドビジョンだよ。コレが見えてるってことは、ＨＭＤはちゃんと機能してる」
「なんだよ・・・」
地味に心臓に悪い。
「名前を言うように言われてるから、言うね」
「あ、ああ・・・」
「沢白美空」
まるで、化学記号かなにか・・・どうでもいいことのように言った。
「滝本・・・誠司」

誠司ＬＰ８０００
美空ＬＰ８０００

ライフポイントがデュエルディスクのパネルに表示される。
２人は初期手札となる５枚をデッキトップから引いた。
「９人とのデュエルのハンデとして、毎回のゲームであなたは先攻」
「わかった。ドローフェイズ」
カードを引く誠司。

いきなりの未成年の、しかも女の子と戦うことになるなんて思ってもいなかった。
正直、抵抗がある。
「メインフェイズに入り、『マシンナーズ・ギアフレーム』を召喚する！」
だが、負けることは、それだけは出来ない。

マシンナーズ・ギアフレーム　攻撃表示
ＡＴＫ１８００　ＤＥＦ０

「ギアフレームの通常召喚時、デッキからギアフレーム以外の『マシンナーズ』と名のつくカードを手札に加える」
それに、この子も「トーナメント・コントローラー」の１人だ。
敵だ。
と、デッキから数枚、カードが飛び出した。
「うおっ！？」
三度驚く誠司。
「デュエルディスクには、オートサーチ機能がついてて、発動したカードの効果の対象となる候補のカードが飛び出すようになってる」
特に表情を変えることもなく、美空は解説した。
「・・・マ、『マシンナーズ・フォートレス』を手札に加える」
俗に、誠司のデッキ【マシンナーズ】は「３０００円デッキ」等と呼ばれている。
だがその名は、十分強力なこのデッキを良く表している。
「☆７『マシンナーズ・フォートレス』と☆２『マシンナーズ・ピースキーパー』を捨てて、マシンナーズ・フォートレスを墓地から特殊召喚！」

マシンナーズ・フォートレス　攻撃表示
☆７　ＡＴＫ２５００　ＤＥＦ１６００

「手札の機械族を、☆合計が８以上になるように捨て、手札または墓地から特殊召喚できる・・・」
諳んじて見せる美空。
自身をコストにして墓地から特殊召喚、という真似もできる。
「永続魔法、『機甲部隊の最前線』を発動」
誠司の場に、魔法カードが現れる。
「伏せカードを１枚出して、エンドフェイズ」

誠司　手札２

「私のターン」
シュッ・・・と静かにカードを引く。
「メインフェイズ。『ゼンマイマニュファクチャ』を発動。そして、『ゼンマイニャンコ』召喚」
美空の脇に工場の一角にあるようなベルトコンベアが現れ、正面にオモチャで出来たような、ネコ型のモンスターも現れた。

ゼンマイニャンコ　攻撃表示
☆２　ＡＴＫ８００

ベルトコンベアでは、無数の機械がガシャゴショとうごめいている。
「ゼンマイニャンコは一度だけ、メインフェイズに相手モンスターを手札に戻せる」
「え」
「マシンナーズ・フォートレスを選択」
『ニャァァァっ！』
突貫したゼンマイニャンコが、マシンナーズ・フォートレスを吹っ飛ばした。

誠司の手札に戻るフォートレス。
「そして、ゼンマイモンスターの効果が発動したことで、『ゼンマイマニュファクチャ』の効果発動。」
ベルトコンベアの機械の動きが更に活発になる。
「デッキから、ゼンマイモンスターをサーチ」
誠司の時と同じように、デッキから数枚カードが飛び出し、美空はその中からカードを1枚選び、後は戻した。
それと同時にベルトコンベアの動きが穏やかになった。
「・・・」
ガシャガシャと動いていた割には、エフェクトは何もしていない。
「『ゼンマイマジシャン』を選択」
そして美空は、この無感情な振る舞いのままだった。
「伏せカードを2枚セットして、ターン終了」

美空　手札3
誠司　手札3

ゼンマイモンスターは、ほとんどが1度しか発動できない効果を持っている。
それらの効果は、場を離れたり、裏側表示にされたりすることで、再び発動できる。
ゼンマイが巻き直されるのだ。
「ドローフェイズ。スタンバイフェイズを経過し、メインフェイズに入る」
美空の場には、低攻撃力のモンスターが攻撃表示のまま存在している。
もちろん、罠だろう。
「・・・」
美空は例によって件のポーカーフェイスを守ったままだ。
「『ハイパー・シンクロン』を召喚する！」

ハイパー・シンクロン　攻撃表示
☆４　ＡＴＫ１６００　チューナー

「ギアフレームと、ハイパー・シンクロンで、シンクロ召喚を・・・」
「『ハイパー・シンクロン』の召喚時に速攻魔法『皆既日蝕の書』発動。全モンスターを裏側守備表示にする」
ゼンマイニャンコ、ギアフレーム、ハイパーシンクロンが裏側守備表示になった。
「っ・・・」
うっかりしていた。
完全に自分の過失だ。
反省その１。
「・・・ターン終了」
「エンドフェイズ。あなたのモンスターは全て表側守備表示になり、その枚数分、あなたはカードをドローして」
ギアフレームと、ハイパーシンクロンがリバースした。
そして、ターンプレイヤーが美空に移る。

美空　手札３
誠司　手札５

「私のターン」
瞬間、風が吹いた。
身の凍るような、冷たい風が。
「『ゼンマイマジシャン』召喚」

ゼンマイマジシャン　攻撃表示
☆４　ＡＴＫ６００

（また、『奈落の落とし穴』に引っかからない・・・）
誠司の伏せカードは、『奈落の落とし穴』だった。
「ゼンマイニャンコ、反転召喚！」
『ニャァ～』

ゼンマイニャンコ　攻撃表示
ＡＴＫ８００

「セットされていたことでゼンマイが巻き直され、ニャンコはもう一回効果が使える。ギアフレームを手札に戻して」
先ほどと同じように、今度はハイパーシンクロンが吹っ飛んだ。
「そして、今度はマニュファクチャと一緒に、マジシャンの効果も発動する」
ゼンマイマジシャンが突き出した杖の先に、魔法陣が現れる。
「『ゼンマイマジシャン』以外のゼンマイの効果が発動したとき、デッキからゼンマイを守備表示で特殊召喚するよ」
同時進行で、マニュファクチャも動く。
「『ゼンマイマイ』を召喚」

ゼンマイマイ　守備表示
☆２　ＤＥＦ２０００

美空が手札に加えたのは、『ゼンマイネズミ』。
「ゼンマイマイは１回だけ、セットされたカードを相手の手札に戻せる」
「またかよっ・・・！」
伏せていた『奈落の落とし穴』を、手札にもどされる。
これで、誠司の場には守備表示の『マシンナーズ・ギアフレーム』と、『機甲部隊の最前線』しかない。

間違いなく、美空は攻めてくる。
「マジシャン、ニャンコを対象に、『揺れる発条秤』を発動。あなたはこの2体のうち、片方を選ぶ。そして選ばれなかった方の☆は、選んだ方と同じになる」
「それなら・・・」
強力なモンスターがエクストラデッキから飛び出してくる可能性を考えれば、できる限り、☆を低くしたい。が、
「☆の低いほうを選んだ場合、私は1枚ドローする」
損失のモトを取らせるのは、できれば避けたい。
「・・・・」
どちらにするか、考える。
「早くして」
(催促すんな)
「・・・・ゼンマイニャンコを選ぶ」

ゼンマイマジシャン
☆4→2

「ドロー」
至って事務的に、美空はカードを引いた。
「☆2になったゼンマイマジシャン、ゼンマイニャンコ、ゼンマイマイを、オーバーレイ」
黒い銀河が現れ、その中に、3体のモンスターが吸い込まれていく。
デュエルディスクのセットの演出か、吸い込まれるような風が吹いているような、そんな感覚がある。
「エクシーズ召喚」
黒いアメーバのような、曖昧なものが現れる。
「『No.96 ブラック・ミスト』」
それは、徐々に姿を変えてゆく。

腕が、脚が飛び出し、長い尾が引き、頭部が現れ、それは顕現した。
顔のような胴体の、眼のような部分が燃え上がる。
Ｎｏ．９６　ブラック・ミスト　攻撃表示
★２　ＡＴＫ１００　エクシーズ素材３

ブラック・ミストの周りを、発光体が３つ、飛び回っている。
エクシーズ素材だ。
「オーバーレイ」って言う必要あるのか？と思いながらも、ブラック・ミストを前にして、誠司は何も喋れなかった。
「っ・・・？」
全身を駆け巡る悪寒。
映像技術の高さに、誠司は驚くばかりだった。

「オイオイ、デッキコンセプトと関係ねーじゃん」
ＨＭＤをつけた音無は、草むらで呟いた。

「ブラック・ミストの攻撃」
『オオオオオオオオオオオオオォォォォォォォォォォォォォォォォォ！！！！！！』

ブラック・ミスト
ＡＴＫ１００
←
ギアフレーム
ＤＥＦ０

胴の牙に噛み砕かれ、ギアフレームが砕ける。
「っ！？」

ダメージはないが、全身の悪寒が止まらない。
気持ちが悪い。
「『機甲部隊の最前線』の効果発動！機械族モンスターが戦闘で破壊された場合、デッキからそれよりも攻撃力が低い、同じ属性の機械族を特殊召喚できる」
場に、モンスターが降り立つ。

スクラップ・リサイクラー　守備表示
☆３　ＤＥＦ１２００

「リサイクラーの特殊召喚時、デッキから機械族モンスターを墓地に送る」
誠司が選んだのは、『マシンナーズ・スナイパー』。
「カードを２枚伏せて、ターン終了・・・」
どうしたことか、美空は肩で息をしている。
（虚弱少女・・・のわけないか）

美空　手札２
誠司　手札７

「ドローフェイズ」

「あ。誠司に『ブラック・ミスト』のこと教えてねぇ・・・」

「墓地の「機械族、地属性、☆４」の『マシンナーズ・ギアフレーム』、『マシンナーズ・スナイパー』の２枚をデッキに戻し、リサイクラーのドロー効果を発動する。」
カードを２枚引く誠司。
（戻されまくったおかげで、手札は売れるほどあるな）
「『サイクロン』を使って、伏せの１枚を破壊する。俺から見て右」

風に巻き上げられて、美空の伏せカードが破壊された。
『次元幽閉』。攻撃モンスター1体を除外する罠カードだ。
「手札の☆4『ハイパーシンクロン』、『マシンナーズ・フォートレス』を捨てて、墓地から『マシンナーズ・フォートレス』を特殊召喚」

マシンナーズ・フォートレス　攻撃表示
☆7　ＡＴＫ２５００

「続いて、『マシンナーズ・ピースキーパー』を通常召喚」

マシンナーズ・ピースキーパー　攻撃表示
☆2　ＡＴＫ５００　ユニオン

「ピースキーパーの効果発動。1ターンに1度、他の機械族モンスターに、このカードを装備できる」
誠司が『マシンナーズ・ピースキーパー』のカードを魔法・罠ゾーンに移すと、場のピースキーパーが変形し、フォートレスと合体した。
「ピースキーパーは、フォートレスの破壊を肩代わりできる」
「知ってる」
ボソッ、と美空は呟いた。
「それじゃぁ、バトルフェイズに移る」
「どうぞ」
気のせいか、美空の表情が、先ほどよりも重い。
「ピースキーパーを装備したフォートレスで攻撃する！」

「やらかしやがった！」

「ブラック・ミストの効果発動」

「よし来た」
ボソっと呟く誠司。
音無からはブラック・ミストのことは聞いていなかったが、ただの低攻撃力モンスターのわけがない。
なにかしらの効果を持っているハズ。
例えば・・・・敵を迎撃できるような効果を。
（だから、破壊を肩代わりできるピースキーパーを装備したんだ）
ユニオンモンスターの装備は、単純に『聖なるバリアーミラーフォースー』への警戒にもなる。
「このカードが相手と戦闘を行う攻撃宣言時、エクシーズ素材を１つ取り除いて、戦うモンスターの攻撃力の半分を奪い、吸収する」
「吸収効果っ！？」
ブラック・ミストの周りを飛び回っていた光がひとつ、ブラック・ミストに取り込まれた。
『シャドーゲイン！』

マシンナーズ・フォートレス
ＡＴＫ２５００→１２５０

Ｎｏ．９６　ブラック・ミスト
ＡＴＫ１００→１３５０

「・・・迎撃」
『ブラック・ミラージュ・ウィップ！！！！！』
ブラック・ミストの腕が、ズルズルッ・・・と伸び、フォートレスを貫いた。

マシンナーズ・フォートレス
ＡＴＫ１２５０
←

Ｎｏ．９６　ブラック・ミスト
ＡＴＫ１３５０

貫いた両腕がそのまま、誠司を鞭打つ。
「うわっ・・・」
後ずさりするほどの演出だが、痛みは無い・・・ハズだった。
「ぐぁっ！？」
左上腕、右脚に激痛が走り、力が抜けた。
思わずヒザをついてしまう。
「なっ・・・なんっ・・・なんでっ・・・・・・！？」
軽くパニックに陥った。

誠司ＬＰ８０００→７９００

痛みが脳を蹂躙する。
「痛ってぇ・・・・・・！！」
「はぁ・・・はぁ・・・」
見れば、美空は肩で息をして、ふらついていた。

おかしい。
「どうしたんだあの２人・・・？」
ダメージの演出の直後、誠司が地面にヒザをつき、少女はふらついた。
音無の記憶では、誠司はリアクション芸をするようなやつではない。
「・・・もうちょい様子を見てみるか」

「なんだ・・・コレは？」
痛みに顔をしかめながら、誠司は訊ねた。
眼前の、敵に。

「はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・」
美空は息荒く、色白の顔がさらに真っ白になっていた。
誠司の問いから1分は経とうかという時、
「・・・私のチカラ」
たったひとこと。それだけで、
「早くして。まだ、あなたのターン」
続いて出てきた言葉は、催促の言葉だった。
「っ痛・・・」
痛む脚に鞭打ち、立ち上がる誠司。
(なんだよこれ・・・)
ふつふつと湧き上がる疑問と・・・恐怖。
ヒザが笑っている。
「俺は、カ、カードを2枚伏せて・・・ターン終了」

誠司　手札5
美空　手札2

「私のターン」
顔が真っ青で、目つきがきつくなっている美空は、今の誠司にはとてつもなく恐ろしい存在に見えた。
「メインフェイズ。『ゼンマイマニュファクチャ』を発動」
ベルトコンベアが2つ並ぶ。
「2枚目っ・・・!?」
「続いて『ゼンマイネズミ』を召喚」

ゼンマイネズミ　攻撃表示
☆3　ATK600　DEF600

「ゼンマイネズミは、守備表示になることで、墓地からゼンマイを特殊召喚できる」

ゼンマイマジシャンの効果のときと同じ魔法陣が発生し、今度は、墓地からモンスターが蘇る。

ゼンマイマジシャン　守備表示
☆４　ＤＥＦ１８００

「『ブラック・ミスト』のエクシーズ素材になってたヤツか・・・」
さきほどの吸収効果の発動時に取り除かれ、墓地に送られたのがあのカードなら、今、美空の墓地に、モンスターはない。
「ゼンマイネズミの効果が発動したことで、ゼンマイマジシャンとマニュファクチャの効果が発動」
「またっ・・・」
ゼンマイマジシャンが、ゼンマイモンスターを特殊召喚し、マニュファクチャは手札を補う。
しかも今度は手札に加わるのは２枚。
そして、
「『ゼンマイハンター』を攻撃表示で召喚」
ゼンマイマジシャンの効果でデッキから特殊召喚されるモンスター。

ゼンマイハンター　攻撃表示
☆３　ＡＴＫ１６００

「そっ、そのタイミングで、罠発動！」
誠司の場に伏せられていたカードが開く。
使う機会を奪われていた、『奈落の落とし穴』だった。
「攻撃力１６００以上のモンスターの召喚成功時、ソイツを破壊する！」
「『トラップ・スタン』」
誠司の手に連鎖するように発動される、美空の罠。

「えっ・・・」
「このターン、このカード以外の罠は全て無効」
『奈落の落とし穴』の映像が爆ぜる。
「そ、そんな・・・」
「ハンターの効果を発動。『ゼンマイハンター』以外のゼンマイをリリースして、相手の手札を1枚、墓地に送る」
「えぇっ・・・！？」
ゼンマイマジシャンがリリースされ、ゼンマイハンターのボウガンに、矢がセットされる。
『シュートドロップ！』
誠司の手札を、矢が射抜く。
墓地へ送られる、『死者蘇生』。
「ああっ・・・」
「☆3『ゼンマイハンター』、『ゼンマイネズミ』をオーバーレイ・・・」
黒い銀河再び。
「エクシーズ召喚。『発条空母ゼンマイティ』」

発条空母ゼンマイティ　攻撃表示
★3　ＡＴＫ１５００

発条仕掛けの巨大な空母。
まさにそんなモンスターが、現れる。
「ゼンマイティは、1ターンに1度、エクシーズ素材を1つ取り除いて、手札、デッキからゼンマイを特殊召喚できる。『ゼンマイネズミ』を攻撃表示で特殊召喚」
カタパルトから射出されるようにして、モンスターが現れる。

ゼンマイネズミ　攻撃表示
☆3　ＡＴＫ６００　ＤＥＦ６００

「ゼンマイネズミを守備表示にして、墓地から『ゼンマイマジシャン』を守備表示で特殊召喚」

ゼンマイマジシャン　守備表示
☆４　ＤＥＦ１８００

「ネズミの効果が発動したことで、マジシャンの効果が発動」
「！これって・・・！」

「ループコンボじゃん」
誠司はもう負けるかもしれない。
音無はそんな気がしてきた。

「『ゼンマイハンター』特殊召喚」

ゼンマイハンター　攻撃表示
☆３　ＡＴＫ１６００

「ハンターの効果でマジシャンをリリースして、あなたの手札を墓地に送る」
またも射抜かれ、殺される、誠司の手札。
『マシンナーズ・フォートレス』
誠司は何もできず、黙って見ていることしか出来ない。
「『ゼンマイハンター』と『ゼンマイネズミ』で、エクシーズ召喚」
３度目の黒い銀河と、その中から現れる、２隻目の巨大空母。

発条空母ゼンマイティ　攻撃表示
★３　ＡＴＫ１５００

「ゼンマイティの効果発動」
　エクシーズ素材を取り込んだゼンマイティが、モンスターを射出する。

ゼンマイマジシャン　守備表示
☆４　ＤＥＦ１８００

「ゼンマイティの効果で特殊召喚された場合でも、『ゼンマイマジシャン』の効果は発動する」
「・・・だろうな」
「『ゼンマイナイト』召喚」

ゼンマイソルジャー　攻撃表示
☆４　ＡＴＫ１８００

「☆４の『ゼンマイマジシャン』と『ゼンマイソルジャー』をオーバーレイ・・・」
　この黒い銀河の演出も、４回目だ。
「エクシーズ召喚。『発条機甲ゼンマイスター』」

発条機甲ゼンマイスター　攻撃表示
★４　ＡＴＫ１９００　エクシーズ素材２

「・・・っ」
「ゼンマイスターは、自身のエクシーズ素材×３００ポイント、攻撃力が上がる」

発条機甲ゼンマイスター
ＡＴＫ１９００→２５００

「マジ・・・かよ」
眼前に並ぶ、壁。
発条空母ゼンマイティ　攻撃表示
★３　ＡＴＫ１５００　エクシーズ素材１
発条空母ゼンマイティ　攻撃表示
★３　ＡＴＫ１５００　エクシーズ素材１
Ｎｏ．９６　ブラック・ミスト　攻撃表示
★２　ＡＴＫ１３５０　エクシーズ素材２
発条機甲ゼンマイスター　攻撃表示
★４　ＡＴＫ２５００　エクシーズ素材２
映像でしかないはずの彼らには、圧倒的な威圧感があった。
皆が一様に、誠司を敵と見なし、叩き潰そうとしている。
そんな威圧感が。
「あ・・・・っ」
脚がすくむ。
そして恐怖は、心と身体を蝕み、思考を停止させ、人を盲目にする。
「バトルフェイズ。ブラック・ミストで、フォートレスを攻撃」
そして、ブラック・ミストの効果が発動する。
「エクシーズ素材を取り除き、マシンナーズ・フォートレスの攻撃力を奪う」
『シャドー・ゲイン！！』
Ｎｏ．９６　ブラック・ミスト
ＡＴＫ１３５０→２０２５

マシンナーズ・フォートレス
ＡＴＫ１２５０→６７５

「化け物っ・・・」
パニック状態の誠司の口を、突いて出る言葉。
そして、
「・・・っ」
美空の顔が、ゆがんだ。
『ブラック・ミラージュ・ウィップ！！！！！！！！！』

Ｎｏ．９６　ブラック・ミスト
ＡＴＫ２０２５
←
マシンナーズ・フォートレス
ＡＴＫ６７５

黒い触手はフォートレスを貫き、そのまま、誠司を弾き飛ばす。
「っだぁっ！！！」

誠司ＬＰ７９００→６５５０

飛ばされた身体は、地面に叩きつけられ、
「がっ・・・」
衝撃と痛みにうめく。
「・・・マシンナーズ・フォートレスの効果で、私のカードを１枚破壊するんでしょ？
選んで」
よろよろと、ゼンマイスターを指差す誠司。
瞬間、美空の伏せカードが開く。

「『我が身を盾に』発動。ＬＰ１５００をコストに、モンスターを破壊するカードの効果を無効にする」

美空ＬＰ８０００→６５００

絶望。

立ち上がることも出来ない誠司。

「・・・ゼンマイティのダイレクトアタックっ」

まるで、それは

「待ってくれ・・・」

死刑の宣告のようだった。

『ワインドアップ・フルバースト！！！』

ゼンマイティから、多量の砲撃が乱射される。

動けない誠司に、向かって。

爆音が響き、誠司に、物理的なダメージを与える。

残酷に。徹底的に。

誠司ＬＰ６５５０→５０５０

「もう１体のゼンマイティで攻撃っ・・・」

『ワインドアップ・フルバースト・セカンド！！！！』

２度目の爆撃。

誠司ＬＰ５０５０→３５５０

「ゼンマイスターの攻撃っ！」

美空はもう、叫んでいた。

『オーバーワインドアップ・ディストーション！！』

誠司ＬＰ３５５０→１０５０

誠司は、再び倒れた。

「はぁっ・・・はぁっ・・・」

誠司とは対照的に、まだ立つ美空の頬を大量の脂汗が伝い、アスファルトに落ちてシミを作った。

誠司は、存在するはずの無い、物理的なダメージを立て続けに受けて、それでも、意識が飛んでいなかった。

気絶することすら、許されなかった。

（もう・・・）

出血も、骨折も無かったが、

（イヤだ）

心が、折れていた。

折れる（後書き）

誠司は、良くも悪くも普通の人間。

そういう人間のつもりで書きました。

何度も見返して、何度も手直ししましたが、それでもミスがあったら、本当にすみません。

亀投稿ですが、絶対完結はさせます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6719w/

家族奪還ゲーム

2011年12月11日12時50分発行